



中村俊定文庫
文庫 18
380



宝曆十一年

花の心

序



富向山跡も俗ありは一免と
南中今り小左更子山より折るハ
阿字親判を考と一食ハ英厚と
捨木乃實を捨小されや粉膏
法界の守免工屋ヤリ山を下アミハ
蒼心密家の伴潜を極く雪中

三世の凡光をきくは謂ふ四曼陀の
ひとくちあしむ、ちのま道にまのま
ふよハむくし、少業のむけ法仰の
急もまふく入居く、ひくハ業跡の
難中の白、く、かとろく、か、
から、手冊のく、く、矢とま、ま、送者の
切る、傾り、地と、やむ

寶曆陳文



寶曆辛巳年



歌仙行

荒川の甲斐とてんも梅のつれ
 淵伽とを解りて船はとく
 けの宴の都りてあめさのゆき
 とくはとてふ下り大ユ
 月ふりの名は月丸う
 口若さ先ゆくもの、系舟の音

夢六

方更
 乙次
 金糸
 渡道
 子來



梅舟画



茸物り可しぬ山の有る
産相子似たる筈のつみ
降屋も手度ふれし浮きわら
六月うらみのおきふま
鄭阿りそ夢阿り圃しき通り
阿ちろ毛持の醫者の附合
川ありけり所のかそそ
禁り出ろのきい有眼

更 叱 危 道 末 更 次 危

孝川とさるるけり
着とふ時の隙か 狼是
咲花の便道く 赤阿りさ
山の枝物り野も若ふは
そやくと套の者の盆のうへ
動くすのしきりかちり
ふ似とかりふりしきり
扱雨のきり旭しは

道 来 更 見 危 末 更

ふ蓮年水涼くははえり
帯乃松も水乎奇の那
結き序ふ水いとかこ旅あかり
男もくぬ、不思儼くは
京よ〜れ無〜新地の住まぢり
秋のいろ先島ちりさや
名月子かこえ〜空と大るそや
な〜ん〜中〜ふ〜一軒

兒 危 尾 未 更 見 来 乃

肉體は空人てこたぢ〜れ
家賃は扱のまのとふ〜と
障〜ぬ口も木履の毎をふ〜
あ〜〜 ぢ〜〜 ぢ〜生〜
あ〜〜 ぢ〜〜 ぢ〜山〜の〜
あ〜〜 ぢ〜〜 ぢ〜理〜の〜え〜

危 更 見 来 尾 執毫

先きのむ指の木にけり友木を
 いふ葉や袖ふき猿のとの思ひ
 あらさるゝとささりてや竹枕
 柿ぬーや栢はちきりー山
 鳴り秋の聲くる 熟柿の旬
 紀の石や空柑の花より部々
 嵐よかまの芋とふらーりり
 公雨
 其角
 嵐雪
 去來
 又考
 許六
 女州

栗柿ハ妻とさしぬり梨乃花
 毛のく名のふらふとさしり種老か
 浪柿の静り 秋をたぐりりり
 巴静
 麥林
 更登

け十幸の句ハ八宗を座を登せー吟こさる
 去年の戒川、赤木の實を拾ふしその合を木の
 實を子雲く、松、執川地のやの、ヨリ拾ひん、と、思ふ
 小野山、佐、佐、左、更、志

閑室琴より
七戒と題して

雪涼齋

左更

妄語

物らぬ花下嘘形——福奇物

偷盜

此心糸のかき違ひ凍——瓜をけ

邪淫

かき違ひそと海ぬ合ふそ女帝花

殺生

凍る月よ水と親せとありあり

飲酒

雲の尾の跡ハきのよ
可くなくけ

菜路菴瓢中吟

笑あ〜と莖を搦る柳のり

耳得

そほやあさむきんを捨てる

盈行

野うすての胃のふあり棉り花

方之

青きふり花ふくまよ〜郭り

文水

をけい水り巧いこときん

孤柳

浮遊やそれふとひくき〜

赤水

送ひ子のあがり月のおろ敷

芙蓉

身両りむり〜の友子か〜り

素白

おろく〜蝶の羽かろき日和る

鳳杖

静〜日ハま〜梅〜花〜り

南江

夜よ〜秋のかくおをとり

錦岡

秋の丑亦なをみゆ〜田歩〜

巴流

空魚のあ〜花〜秋〜り

仙弁

裾を啼きかへく一車ひらり
 馬をるりのおろし又けりまをり
 二寸さりか子顔か一もま顔
 重いく先一スー一まふ一う
 うかやふかよまふ日のあゆこ
 あけく一ま草や春の果ひこ
 まふと川まふと一水鏡
 夕まやふくハあふあふく
 昔我

氷壺
 氷壺の言き中一か
 稲株の言き中一か
 一ま草や秋の白ひのさく
 鳴るひ花ひけ一陸の
 音のふん風のまふ本音の
 名月やま音ま清ら一の
 出くまれくけのまふ
 一山嶼の抱く下り一まふ
 折山

夢^私り其をりふや松^私やと
 三 醉
 らくぬすや水の 節くはけり
 渭 水
 苦うれそ 冥もと 思ふ木 権ひ
 大 耳
 下 系^私り 妾 拵^私り 川 ちとり
 雅 堂
 白^私よこ 梅の 枝 折る 氷 室^私ふ
 残 馬
 赤^私ーら 一^私く 日^私し 露 露の 葉 山 子^私は
 六 賈

送 孫 子 と 侍 一^私く この 梅 竹 子
 夢 旦

花^私よこ 一^私は 多^私く 一^私は 多^私く 梅 の 角
 元 子
 社^私く 葉 の 花 の さく 入 梅 子
 雪 也
 白^私雨 や 軒 走る 音^私は 拵^私り 川
 鷺 三
 限^私ふ き 夜^私ささく 暮^私る 花^私さ^私り 外
 都 雁

引のさけ 際のち^私や 一^私の花
 風 跡
 夕^私色 の 宴^私を の かえ^私く 新 酒^私ふ
 梅 畠

不こふ花又せう 渡河の小舟のふ
清きうらやとけく やいろのわり
類うけく世のふきハー や箱の花
返るーーと極あうれの水鏡のふ
川まや根のふと雲よあうう
やう川とつ指入まふ雲雀のふ

雲裡 南空 紀來 八龜 麻父 素園 鐘山

際め日と雲やうかハー 梨の花
葉ふ梅や音のハー 山
尾りかえく短うきものやまーのふ
志くうけくや何う花もあう 鳥
ありさふやあうれぬさきと海かえり
うらうらあうらうら

金危 子來 乙児 渡道 行脚 鳥申 麦途

昔くうのきさの忍くた籠の角
 吐月
 麻すきあまの道まよし山さく
 丑全
 振かえり香の碑や梅のくれ
 花明
 足直りハちき屋らり冒の梅
 萬古
 はくく月の正月くし雲雀の
 風并
 五十年冒を彩る鶺鴒の角
 白牛
 ものあれく時久く柿の梢の
 蓼太

附録

歌仙行

淋—さのをい日とりか人こ
 渡道
 着美玉やく板一本
 金色
 柳淋り勅使の道をあいら
 し
 垂つて膝り着るく
 後
 月の秋あまの似る振のふり
 兔
 大川河津時めはま川も
 次

葉つくる杉戸も市ホキー
乳呑とはまきくゆりもま
名馬月より白くそのと年と
小寺ハ鐘もあちくち
大指のさかりをうき
使のまのり鬚きつ
あゝ聖りまのり
吳、暖まつり

尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾

月の暁えくけく
あつ川と代り
花むのー
花く
まりの母と
あら入
酒ぬとは
山不と

尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾
左更 執筆 尾 尾 尾 尾 尾

かきふせうり女の旅やつ連
らう送夏と終りしそも
ちのさうさ月のもりこかり
葉のよきふらふ花のよきこ
やうくう瓶とさけふ家あひ
葉はなせしをけりたふ
弓張の下さちみちも軒もひ
時を砥りゝのをさくらら

石更 危 危 更 危 危

秋きの札り兎の赤むこふ
那葉の腹をよこ立くみ
二つ啼えつ啼あやう明鳥
きりくくと帆を曳けあふ
き山よりいよと建つ花の咲時分
先を春のよきのやうき

更 兎 危 危 更 兎

有夜の浦濱に實お一女の
月を洗ふ富向山に佳景を
かそへる

海うけく田毎の不二やさ月晴

雪中菴

END

舟にのりて影寄るととむ
を流る脚の匂と借言の野舟
合せりく物の心持も呼まは
そと女はと云ふそ云はし
半の舟も嬉しくありのこも
成すはともいひて梓ふせんせ
あゝと云ふくす神はふふあゝ

川んころの治生を為す所は
和しぬ平時何れも厚幸に
之れ有るは山を徳と為す所也



駿府城北 知泉刀

